

木魂

夢野久作

青空文庫

……俺はどうしてコンナ処に立ち佇どまっているのだろうか……踏切線路の中央まんなかに突立って、自分の足下をボンヤリ見詰めているのだらう……汽車が来たら轢ひき殺されるかも知れないのに……。

そう気が付くと同時に彼は、今にも汽車に轢かれそうな不吉な予感を、背中一面にゾクゾクと感じた。霜しもで真白になっている軌条の左右をキョロキョロと見まわした。それから度の強い近眼鏡の視線を今一度自分の足下に落すと、霜しも混まじりの泥と、枯葉にまみれた兵隊靴で、半分腐りかかった踏切板をコツンコツンと蹴けつてみた。それから汗じみた教員の制帽かぶを冠かぶり直して、古ぼけた詰襟つめえりの上衣うわぎの上から羊ようかん羹色の釣鐘マントを引っかけ直しながら、タツタ今通り抜けて来た枯木林の向うに透いて見える自分の家の垂鉛屋根トタンを振り返った。

……一体俺は、今の今まで何を考えていたのだろうか……。

彼はこの頃、持病の不眠症が嵩こじた結果、頭が非常に悪わるくなっている事を自覚していた。殊に昨日は正午過ぎから寒さがグングン締まって来て、トテモ眠れそうにないと思われたので、飲めもしない酒を買って来て、ホンの五勺しゃくばかり冷ひやのまま飲んで眠ったせいか、

今朝けさになつてみると特別に頭がフラフラして、シクンシクンと痛むような重苦しさを脳髓の中心に感じていたのであつた。その頭を絞るように彼は、薄い眉まゆをグツト引寄せながら、爪先つまさきに粘りねば付いている赤い泥を凝視みつめた。

……おかしいぞ。今朝は俺の頭がヨツポドどうかしているらしいぞ……。

……俺は今朝、あの枯木林の中の亜鉛トタン茸ぶきの一軒屋の中で、いつもの通りに自炊の後始末をして、野良犬のらが這入はいらないようにチャント戸締りをして、ここまで出かけて来たことは来たに相違ないのだが、しかし、それから今までの間じゆう、俺は何を考えていたのだろう。……何か知らトテモ重大な問題を一生懸命に考え詰めながら、ここまで来たような気もするが……おかしいな。今となつてみるとその重大な問題の内容を一つも思い出せなくなっている……。

……おかしい……おかしい……。何にしても今朝はアタマが変テコだ。こんな調子では又、午後の時間に居眠りをして、無邪気な生徒たちに笑われるかも知れないぞ……。

彼はそんな事を取越苦勞しいしい上衣の内ポケットから大きな銀時計を出してみると、七時四十分キツカリになっていた。

彼はその8の処に固まり合っている二本の針と、チツチツチツと廻転している秒針

とを無意識にジーツと見比べていた……が……やがて如何にも淋しそうな……自分自身を嘲るような微苦笑を、度の強い近眼鏡の下に瘻攣させた。

……ナーンだ。馬鹿馬鹿しい。何でもないじゃないか。

……俺は今学校に出かける途中なんだ。……今朝は学課が初まる前に、調べ残しの教案を見ておかなければならないと思つて、午後の時間の睡むいのを覚悟の前で、三十分ばかり早めに出て来たのだ。しかも学校まではまだ五基米以上あるのだから、愚図愚図する時間の余裕が無くなるかも知れない……だから俺はここに立佇まって考えていたのだ。国道へ出て本通りを行こうか、それとも近道の線路伝いにしようかと迷いながら突立っていったものではないか……。

……ナーンだ。何でもないじゃないか……。

……そうだ。とにかく鉄道線路を行こう。線路を行けば学校まで一直線で、せいぜい三基米ぐらいしか無いのだから、こころもち急ぎさえすれば二十分ぐらいの節約は訳なく出来る……そうだ……鉄道線路を行こう……。

彼はそう思い思い今一度ニンマリと青黒い、髻だらけの微苦笑をした。三角形に膨らんだボックスの古鞆を、左手にシツカリと抱き締めながら、白い踏切板の上から半身を傾

けて、やはり霜を被^{かぶ}つている線路の枕木の上へ、兵隊靴の片足を踏み出しかけた。

……が……又、ハツと気が付いて踏み留^{とど}まった。

彼はそのまま右手をソツト額^{ひたい}に当てた。その掌^{てのひら}で近眼鏡の上を蔽^{おお}うて、何事かを祈るように、頭をガツクリとうなだれた。

彼は、彼自身がタツタ今、鉄道踏切の中央に立佇まっていたホントの理由を、ヤツト思出したのであった。そうして彼を無意識のうちに踏切板の中央へ釘付けにしていた、或る「不吉な予感」を今一度ハツキリと感じたのであった。

彼は今朝眼を醒^さまして、あたたかい夜具の中から、冷^つめたい空気の中へ頭を突き出すと同時に、二日酔らしいタマラナイ頭の痛みを感じながら起き上ったのであったが、又、それと同時に、その頭の片隅で……俺はきようこそ間違ひなく汽車に轢^かき殺されるのだぞ……といったようなハツキリした、気味の悪い予感を感じながら、冷^かたい筧^{かけひ}の水でシミジミと顔を洗ったのであった。それから大急ぎで湯を湧^わかして、昨夜^{ゆうべ}の残りの冷飯^{ひやめし}を掻^かき込んで、これも昨夜のままの泥靴をそのまま穿^はいて、アルミの弁当箱を詰めた黒い鞆を抱え直し抱え直し、落葉まじりの霜の廢道を、この踏切板の上まで辿^{たど}つて来たのであったが、そこで真白い霜に包まれた踏切板の上に、自分の重たい泥靴がベタリと落ちた音を耳にする

と、その一刹那せつなに今一度、そうした不吉な、ハッキリした予感と、その予感おびに脅やかされつつある彼の全生涯とを、非常な急速度で頭の中に廻転させたのであった。そうしてそのまま踏切を横切つて、大急ぎで国道を廻まわろうか。それとも思い切つて鉄道線路を伝つて行こうかと思ひ迷いながらも、なおも石像のように考え込んでいる自分自身の姿を眼の前に幻視しつつ、そうした気味の悪い予感に襲われるようになった、そのソモソモの不可思議な因縁いんねんを考え出そう考え出そうと努力しているのであった。

彼がこうした不可思議な心理現象に襲われ初めたのは昨日きのう今日の事ではなかつた。

昨年さくねんの正月から二月へかけて彼は、最愛の妻と一人子を追い継ぎに亡くしたのであったが、それからというもの彼は殆んど毎朝のように……きょうこそ……今日こそ間違ひなく汽車に轢ひき殺される……といったような、奇妙にハッキリした予感を受け続けて来たものであった。しかし、それでもそのたんびに頭の単純な彼は、一種の宿命的な氣持ちを含んだ真剣な不安に襲われながらも、踏切の線路を横切るたんびに、恐る恐る左右を見まわし見まわし、国道伝いに往復したせいであつたらう。夕方になると、そんな不安な感じをケロリと忘れて、何事もなく山の中の一軒屋に歸つて来るのであった。そうして無けなし

の副食物おかずと鍋飯なべめしで、貧しい夕食を済ますと、心の底からホツとした、一日の労苦を忘れて気持ちになつて、彼が生涯の楽しみにしている「小学算術教科書」の編纂へんさんに取りかかるのであつた。

しかし彼は、そうした不思議な心理現象に襲われる原因を、彼自身の神経衰弱のせいとは決して思つていなかった。むしろ彼が子供の時分から持っている一種特別の心理的な敏感さが、こうした神秘的な予感の感受性にまで変化して来たものと思ひ込んでいた。

……という理由は、ほかでもなかつた。

彼は、そうした意味で彼自身が、一種特別の奇妙な感受性の持主に相違ない……と信じ得る色々な不思議な体験を、十分……十二分に持つていたからであつた。

彼は元来、年若い両親の一人息子で、生れ付きの虚弱児童であつたばかりでなく、一種の風変りな、孤独を好む性質たちであつたので、学校に行つても他の生徒と遊び戯たわむれた事などは殆んど無かつた。その代りに学校の成績はいつも優等で、腕白連中に憎まれたり、いじめられたりする場合が多かつたので、学校が済んで級長の仕事に片付くと、逃げるように家に帰つて、門口から一步も外に出ないような状態であつた。

けれども極く稀まれにはタツタ一人で外に出ることも無いではなかつた。それはいつでも極

く天氣のいい日に限られていて、行く先も山の中にきまり切っていた。……という理由は外ほかでもない。彼は生れつき山の中が性しょうに合っているらしいので、現在でもわざわざ学校から懸け離れた山の中の一軒屋に住んで、不自由な自炊生活をしている位であるが、こうした彼の孤独好きの性癖は既に既に、彼の少年時代から現われていたのである。青い空の下にクツキリと浮き立った山々の木立を、お縁側から眺めていると、子供心に呼びかけられるような気持になった。一方に彼の両親またも亦、引っこみ勝ちな彼の健康のために良いとも思ったのであろう。そんな時には喜んで外出を許してくれたので、彼は中学校の算術教程とか、四則三千題とかいったようなものを一二冊ふところに入れて、近所の悪たれどもの眼を避けながら、程近い郊外を山の方へ出かけたものであった。

それは十や十一の子供としてはマセ過ぎた散歩であったが、それでも山好きの彼にとつては、この上もない楽しみに違いなかった。彼はそうした散歩のお蔭で、そこいらの山中の小径こみちという小径を一本残らず記憶おぼえ込んでしまっていた。どこにはアケビの蔓つるがあつて、どこには山の芋いもが埋まっている。人間の顔によく似た大岩がどこの藪やぶの中に在つて、一二股ふたまたになった幹の間から桜の木を生やした大榎えのきはどここの池の縁に立っているという事まで一々知っていたのは恐らく村中で彼一人であつたろう。

ところで彼は、そんな山歩きの途中で、雑木林の中なんぞに、思いがけない空地を発見する事がよくあった。それは大抵、一反歩たんぷか二反歩たんぷぐらいの広さの四角い草原で、多分屋敷か、畠はたけの跡だろうと思われる平地であったが、立木や何かに蔽おほわれているために幾度も幾度も近まわりをウロ付きながら、永い事気付かずにいるような空地であった。そのまん中に立ちながら、そこいら中をキョロキョロ見まわしていると、山という山、丘という丘が、どこまでもシイーンと重なり合っていて、彼を取とりかこ囲む立木の一本一本が、彼をジイツと見守っているように思われて来る。足の下かすの枯葉がプチプチと微かな音を立てて、何となく薄気味が悪くなる位であった。

そんな処を見付けると彼は大喜びで、その空地の中央の枯草に寝ころんで、大好きな数学の本を拵とげて、六ヶ《むずか》しい問題の解き方を考えるのであった。むろん鉛筆もノートも無しに空間で考えるので、解き方がわかると、あとは暗算で答を出すだけであったが、両親から呼ばれる気づかいは無いし、隣近所の物音も聞こえないのだから、頭の中が硝子がらすのように澄み切つて来る。それにつれて家うちではどうしても解けなかつた問題が、スラたあいと他愛もなく解けて行くので、彼はトテモ愉快的な気持になって時間の経たつのを忘れていることが多かった。

ところが、そんな風に数学の問題に頭を突込んで一心になっている時に限って、思いもかけない背後うしろの方から、ハッキリした声で……オイ……と呼びかける声が聞こえて、彼をビツクリさせる事がよくあった。それは、むろん父親の声でもなければ先生の声でも、友達の声でもない。誰の声だか全くわからなかったが、しかし非常にハッキリしていた事だけは事実であった。ダシヌケに大きな声で……ウオイ……という風に……。だから彼はビツクリして跳ねは起きながら振り返ってみると誰も居ない。雑木林がカーツと西日に輝いて、鳥の声一つ聞こえないのであった。

それは実に不思議な、神秘的な心理現象であった。最初のうち彼は、そんな声を聞きたんびに髪の毛がザワザワとしたものであったが、しかし、それは一時的の神経作用といったようなものではなかったらしく、その後も同じような……又は似たような体験を幾度となく繰返したので、彼はスツカリ慣れっこになってしまったのであった。

彼が、やはり数学の問題を考え考えしながら、山の中の細道をどこまでもどこまでも歩いて行くと、いつからともなく向うの方から五六人か七八人位の人数にんずでガヤガヤと話しながら、こっちの方へ来る声が聞こえ初める。むろんその道が一本道になっていることを彼は知っているし、遣やつて来る連中は大人に違いないのだから、その連中に行遣ゆきあつたら、道み

傍ちよばたの羊齒しだの中へでも避けてやる気で、やはり数学の問題を考え考え一本道を近付いて行くと、不思議なことにとどこまで行つてもその話声の主人公の大人たちに行き遭わない。何だか可笑おかしい。変だな……と思ううちに、その細い一本道はおしまいになって、広い広い田圃たんぼを見晴らした国道の途中か何かにヒョッコリ出てしまうのであった。ちようど向うから来ていた大勢の人間が、途中で虚空こくうに消え失うせたような気持であつた。

それは決して気のせいでもなければ神経作用とも思えなかつた。たしかに、そんな声が聞こえるのであつた。ちようど一心に考え詰めているこちらの暗い気持と正反対の、明るいハッキリした声が聞こえて来るので、気にかけるともなく気にかけていると、そのうちに何かしらハツと気が付くと同時に、その声もフツツリと消え失せるような場合が非常に多いのであつた。

しかし元来が風変りな子供であつた彼は、そんな不可思議現象を、ソツクリそのまま不可思議現象として受入れて、山に行くのを気味悪がったり、又は両親や他人に話して聞かせるような事は一度もしなかつた。そのうちに大きくなつたら解わかる事と思つて、自分一人の秘密にしたまま、忘れるともなく次から次に忘れていた。そうして彼は、それから後、中学から高等学校を経て、大学から大学院まで行つたのであるが、そのうちに彼の両親は

死んでしまった。それから妻のキセ子を貰^{もら}ったり、太郎という長男が生まれたり、又は学
士から、小学教員になりたいというので、色々と面倒な手続きをして、ヤツトの思いで現
在の小学校に奉職する事が出来たりしたものであったが、それ迄の間というものの学校の図
書館や、人通りの無い国道や、放課後の教室の中なぞでも、幾度となくソナのような知ら
ない声から呼びかけられる経験を繰返したのであった。

しかし彼は、そんな体験を他人に話したことは依然として一度も無かつた。ただそのう
ちにだんだんと年を取つて来るにつれて、時々そんな事実につつかるといふ間に、いくら
ずつ気味が悪くなつて来たことは事実であつた。……こんな体験を持つてゐる人間は事
に依^よると俺ばかりじゃないかしらん。……他人がこんな不思議な体験をした話を、聞いた
り読んだりした事が、今までに一度も無いのは何故^{なぜ}だろう。……俺は小さい時から一種の
精神異状者に生れ付いてゐるのじゃないか知らん……なぞと内^{ない}々々で気を付けるようにな
つたものである。

ところが、そのうちに、ちようど十二三年ばかり前の結婚当時の事、宿直の退屈^し凌^{しの}ぎに、
学校の図書室に這^{はい}入り込んで、室の隅に積み重ねて在^ある「心霊界」という薄ッペラな雑誌
を手に取りながら読むともなく読んでゐると、思いがけもなく自分の体験にピッタリし過

ぎる位ピッタリした学説を発見したので、彼はドキンとする程驚ろかされたものであった。それは旧露西亞ロシヤのモスコ―大学に属する心靈学界の非売雑誌に発表された新学説の抄訳紹介で「自分の魂に呼びかけられる実例」と題する論文であつたが、それを読んでみると、正体の無い声に呼びかけられた者は決して彼一人でないことがわかつた。

「……何にも雑音の聞こえない密室の中とか、風の無い、シンとした山の中などで、或る事を一心に考え詰めたり、何かに気を取られたりしている人間は、色々な不思議な声を聞くことが、よくあるものである。現にウラルの或る地方では「木魂すだまに呼びかけられると三年経たぬうちに死ぬ」という伝説が固く信じられている位であるが、しかもその「スダマ」、もしくは「主ぬしの無い声」の正体を、心靈学の研究にかけてみると何でもない。それは自分の靈魂が、自分に呼びかける声ほかに外ならないのである。

すなわち一切の人間の性格は、ちょうど代数の因子分解と同様な方式で説明出来るものである。換言すれば一個の人間の性格というものは、その先祖代々から伝わつた色々な根性……もしくは魂の相乗積（A+B）に外ならないので、たとえば（A₂-B₂）という性格は（A+B）という父親の性格と（A-B）という母親の性格が遺伝したものの相乗積（A+B）に外ならない……と考えられるようなものである。ところでその（A₂-B₂）という全性格の中でも

(A - B) という ワンファクター 因子……換言すれば母親から遺伝した、たとえば「数学好き」という魂が、その (A - B) 的傾向……すなわち数学の研究慾に凝り固まって、どこまでも他の魂の存在を無視して、超越して行こうとするような事があると、アトに取り残された (A + B) という魂が、一人ポツチで遊離したまま、徐々と、又は突然に一種の不安定的な心霊作用を起して (A - B) に呼びかける……つまり一時的に片寄った (A - B) 的性格を (A + B) の方向へ呼び戻して、以前の全性格 (A2 - B2) の飽和状態に立ち歸らせらるべくモーションをかけるのだ。その魂の呼びかけが、そっくりそのまま声となって錯覚されるので、その声が普通の鼓膜から来た声よりズツト深い意識にまで感じられて、人を驚ろかせ、怪しませるのは当然のことではなければならぬ」

といったような論法で、生物の外見の上に現われる遺伝が、くみあわせ 組 合 式、一 列 式、並 列 式、又は等比、等差などという数理的な配合によって行われているところから説き初めて、精神、もしくはは性格、習慣などという心霊関係の遺伝も同様に、数理的の原則によって行われている事実に至るまで、幾多の犯罪者の家系を実例に挙げて説き及ぼしている。それから天才と狂人、幽霊現象、千里眼、予言者などという高等数学的な心理の分解現象の実例を、詳細に互わたつて数理的に説明して在ったが、その中でも特別に彼がタタキ付けられた一節は、

普通人と、天才と、狂人の心理分解の状態を、それぞれ数理的に比較研究する前提として掲げている、次のような解説であった。

「……天才とか狂人とかいうものは詰まるところ、そうした自分の性格の中の色々な因子の中の或る一つか二つかを、ハッキリと遊離させる力が意識的、もしくは無意識的（病的）に強い人間を指して云うので、天才が狂人に近いという俗説も、斯様に観察して来ると、極めて合理的に説明されて来るのである。……太陽を描いて発狂したゴホや、モナ・リザの肖像を見て気が変になった数名の画家などはその好適例である。すなわち自分の魂をその絵に傾注し過ぎて、モトの通りのシツクリした性格に帰れなくなつたので、その結果スツカリ分裂して遊離してしまつた個々別々の自分の魂から、夜も昼も呼びかけられるようになってしまつたのだ。

……又、ベクリンという画伯は、自分に呼びかける自分の魂の姿を、骸骨がバイオリンを弾いている姿に描きあらわして不^ふ朽^{きゆう}の名を残したものである。

……又、これを普通人の例に取つて見ると、身体^{からだ}が弱かつたり、年を老^とつて死期が近付いたりした人間は、認識の帰納力とか意識の綜合力とかいつたような中心^{ドミナント}主力が弱つて来る結果、意識の自然分解作用がポツポツあらわれ初める。時々、どこからか自分の声に呼

びかけられるようになる。だから身体が弱かった場合か、又は相当年を老った人間で、正体の無い声に呼びかけられるような事があつたならば、自分の死期の近づいた事に就いて慎重なる考慮をめぐらすべきである」云々うんぬん……。

この論文の一節を読んだ時に彼は、思わずゾツとして首を締めさせられた。生れ付き虚弱な上に、天才的な、極度に気の弱い性格を持つている彼が、そうした不可思議な現象に襲われる習慣を持つているのは、当然過ぎる位当然な事と思わせられた。そうしてそれ以来、普通人よりも天才とか狂人とかいう者の頭の方が合理的に動いているものではないか知らんと、ちゆうしん衷心から疑い出す一方に、時折り彼を呼びかけるその声が、果して自分の声かどうかを、的確に聞き分けてやろうと思つて、シヨツチュウ心掛けていたものであつた。

ところが、ここに又一つの奇蹟が現われた……というのは外でもない。その本を読んでからというもの、彼はどうしたものか、一度もそんな声にぶつからなくなつてしまつた事であつた。ちやうど正体を看破された幽霊なんか何そのように、自分を呼びかける自分の声が、ピッタリと姿を見せなくなつたので、この七八年というもの彼は忘れるともなしにソノ

「自分を呼びかける自分の声」のことを忘れてしまっていた。もっともこの七八年というもの、彼は、所帯を持ったり、子供は出来たりで、好きな数学の研究に没頭して、自分の魂を遊離させる機会が些すくなかつたせいかも知れなかつたが……。

ところが又、その後になつて、彼の妻と子供が死んで、ホントウの一人ポツチになつてしまうと、不思議にも今云つたような心理現象が又もやハッキリと現われ出して、彼を驚かし初めたのであつた。のみならずその声が彼にとつては実にたまらない、身を切るような痛切な形式でもつて襲おそいかりはじめたので、彼はモウその声に徹底的にタタキ付けられてしまつて、息も吐つかれない眼に会わせられることになつたのであるが、しかも、そんな事になつたそのソモソモの因縁を彼自身によくよく考え廻まわしてみようと、それはどうやら彼の亡くなつた妻の、異常な性格から発ほつ端たんして来ているらしく思われたのであつた。彼の亡くなつた妻のキセ子きせこというのは元来、彼の住んでいる村の村長の娘で、この界かい限げんには珍らしい女学校卒業の才媛さいえんであつたが、容貌ようぼうは勿論のこと、氣質までもが尋じん常じょう一様の変り方ではなかつた。彼が堂々たる銀時計の学士様でいながら、小学校の生徒に数学を教えたいのが一パイで、無理やりに自分の故郷の小学校に奉職しているのに、その横合いから又、無理やりに彼の意氣組に共鳴して、一いっ所しょになる位の女だつたので、

ただ子供に対する愛情だけが普通と変っていないのが、寧ろ不思議な位のものであった。つまり極度にヒステリックな変態的じょじょうふうな女丈夫とでも形容されそうな型タイプの女であったが、それだけに又、自分の身体からだが重い肺病に罹かかつても、亭主の彼に苦勞をかけまいとして、無理に無理を押し通して立働たちはたらいていたばかりでなく、昨年こんだくの正月に血を啗はいてたおれた時にも、死ぬが死ぬまで意識の混濁こんたくを見せなかつたものである。ちようど十一になつた太郎の頭を撫なでながら、弱々しい透きとおつた声で、

「……太郎や。お前はね。これからお父さんの云い付けを、よく守らなくてはいけないよ。お前がお父さんの仰おつしや言いる事を肯きかなかつたりすると、お母さんがチャンとどこからか見て悲しんでおりますよ。お父さんが、いつもよく仰言おつしやる通りに、どんなに学校が遅おそくなつても鉄道線路なんぞを歩いてはいけませんよ」

なんかと冗談じやうたんのような口調くちうで云い聞かせながら、微笑わいごうしいしい息を引き取つたもので、それはシツカリした立派な臨終りんしゆうであつた。

彼はだからその母親が死ぬと間もなく、お通夜つうやの晩に、忘れ形見の太郎を引き寄せて、涙ながらに固い約束をしたものであつた。

「……これから決して鉄道線路を歩かない事にしような。お前はよく友達に誘いざなわれると、

イヤとも云いかねて、一所に線路伝いをしているようだが、あんな事は絶対に止める事に仕様じやないか。いいかい。お父さんも決して鉄道線路に足を踏み入れないからナ……」

といったようなことをクドクドと云い聞かせたのであった。その時には太郎もシクシク泣いていたが、元来柔順な児だったので、何のコダワリもなく彼の言葉を受け入れて、心からうなずいていたようであった。

それから後というものは彼は毎日、昔の通りに自炊をして、太郎を一足先に学校へ送り出した。それから自分自身は跡片付を済ますと大急ぎで支度を整えて、吾児の跡を逐うようにして学校へ出かけるのであったが、それがいつも遅れ勝ちだったので、よく線路伝いに学校へ駈け付けたものであった。

けれども太郎は生れ付きの柔順さで、正直に母親の遺言を守って、いくら友達に誘われても線路を歩かなかつたらしく、毎日毎日国道の泥やホコリで、下駄や足袋を台なしにしていた。一方に彼は、いつもそうした太郎の正直さを見るにつけて……これは無論、俺が悪い。俺が悪いにきまつているのだ。だけど学校は遠いし、余計な仕事は持っているし、モトモト自炊の経験はあったにしても、その上に母親の役目と、女房の仕事が二つ、新しく加わった訳だから、登校の時間が遅れるのは止むを得ない。だから線路を通るのは万止

むを得ないのだ……。

なぞといったような云い訳を毎日毎日心の中で繰り返しているのであった。当てもない妻の霊に対して、おんなじような詫びごとを繰返し繰返し良心の呵責を胡麻化しているのであった。

ところが天罰覲面とはこの事であつたらうか。こうした彼の不正直さが根こそげ曝露する時機が来た。しかし後から考えるとその時の出来事が、後に彼の愛児を惨死させた間接の……イヤ……直接の原因になつているとしか思われぬ、意外千万の出来事が起つて、非常な打撃を彼に与えたのであつた。

それはやはり去年の正月の大寒中で、妻の三七日が済んだ翌る日の事であつたが………

……ここまで考え続けて来た彼は、チョット鞆を抱え直しながら、もう一度そこいらをキヨロキヨロと見まわした。

そこは線路が、この辺一帯を蔽うている涯てしもない雑木林の間の空地に出てから間もない処に在る小川の暗渠の上で、殆んど干上りかかった鉄気水の流れが、枯葦の間の処々ところどころにトラホームの瞳に似た微かな光りを放つていた。その暗渠の上を通り越すと

彼は、いつの間にか線路の上に歩み出している彼自身を怪しみもせず、今まで考え続けて来た彼自身の過去の記憶を今一度、シンシンと泌^しみ渡る頭の痛みと重ね合わせて、チラチラと思ひ出しつづけたのであった。

そのチラチラの中には純粹な彼自身の主観もあれば、彼の想像から来た彼自身に対する客観もあった。暖かい他人の同情の言葉もあれば、彼の行動を批判する彼自身の冷めたい正義観念も交^まっていたが、要するにそんなような種々雑多な印象や記憶の断片や残滓^{ざんさい}が、早くも考え疲れに疲れた彼の頭の中で、暈^ほかしくなったり、大うつしになったり、又は二重、絞り、切組^{きりくみ}、逆戻り、トリック、モンタージュの千変^{せんべん}万化^{ばんか}をつくして、或^{ある}は構成派のような、未来派のような、又は印象派のような場面をゴチャゴチャに渦巻きめぐらしつつ、次から次へと変化し、進展し初めたのであった。そうして彼自身が意識し得なかつた彼自身の手で、彼のタツタ一人の愛児を惨死に陥れて、彼をホントウの独ポツ^{ひとり}チにしてしまふべく、不可抗的な運命を彼自身に編み出させて行つた不可思議な或る力の作用を今一度、数学の解式のようにアリアリと展開し初めたのであった。

それは大寒中には珍らしく暖かい、お天気の良い午後のことであつた。

彼は二三日前から風邪を引いていて、その日も朝から頭が重かったので、いつもの通り夕方近くまで居残つて学校の仕事をする気がどうしても出なかつた。だから放課後一時間ばかりも経つと、やはり、何かの用事で居残つていた校長や同僚に挨拶をしいしい、生徒の答案を一パイに詰めた黒い鞆を抱え直して、トボトボと校門を出たのであつた。

ところで校門を出てポプラの並んだ広い道を左に曲ると、彼の住んでいる山懐の傾斜の下まで、海岸伝いに大きな半円を描いた国道に出るのであつたが、しかし、その国道を迂廻して帰るのが、彼にとつては何よりも不愉快であつた。……というのは距離が遠くなるばかりでなく、この頃著しく数を増した乗合自動車やトラック、又は海岸の別荘地に出這入りする高級車の砂ホコリを後から後から浴びせられたり、又は彼を知っている教え子の親たちや何かに出会つてお辞儀をさせられるたんに、彼の頭の中にフンダンに浮かんでいる数学的な冥想を破られるのが、実にたまらない苦痛だからであつた。

ところがこれに反して校門を出てから、草の間の狭い道をコツソリと右に曲ると、すぐに小さな杉森の中に這入つて、その蔭に在る駅近くの踏切に出る事が出来た。そこから線路伝いに四五町ほど続いた高い堀割の間を通り抜けると、百分の一内外の傾斜線路を殆んど一直線に、自分の家の真下に在る枯木林の中の踏切まで行けるので、その途中の大部分

は枯木林に蔽おほわれてしまつていたから、誰にも見付かる氣遣きづかいが無いのであつた。

ところで又、彼はその校門の横の杉森を出て、線路の横の赤土道に足を踏み入れると同時に、はるか一里ばかり向うの山蔭に在る自分の家うちと、そこに待つてゐるのであろう妻子の事を思い出すのが習慣のようになっていた。その習慣は去年の正月に彼の妻が死んだ後までも、以前と同じように引續いていたのであつたが、しかし彼は、その愚かな心の習慣を打消そうとは決してしなかつた。むしろそれが自分だけに許された悲しい權利ででもあるかのように、ツイこの間あいだまで立ち働らいていた妻の病み窶やつれた姿や、現在、先に歸つて待つてゐるであろう吾兒わがこの元氣のいい姿を、それからそれへと眼の前に彷彿ほうふつさせるのであつた。山番小舎のトボトボと鳴る筧かけひの前で、勝氣な眼を光らして米を磨といでゐる妻の横顔や、自分の姿が枯木立の間から現われるのを待ちかねたように両手を差し上げて、

「オーイ。お父さーん」

と呼びかける頬ほっペタの赤い太郎の顔や、その太郎が汲くみ込んで燃やし付けた孫風呂の煙が、山の斜面を切れ切れに這はい上つて行く形なぞを、過去と現在と重ね合わせて頭の中に描き出すのであつた。もつとも時折は、黒い風のような列車の轟ごう音を遣り過やしたあとで、枕木の上に立ち止まつて、バットの半分に火を点つけながら、

……又きようも、おんなじ事を考えているな。イクラ考えたって、おんなじ事を……。
 と自分で自分の心を冷笑した事もあった。そうして四十を越してから妻を亡くした見窄みすぼらしい自分自身の姿が、こころもち前まえ屈かがみになって歩いて行く姿を、二三十間けん向うの線路の上に、幻覚的に描き出しながらも……。

……もつともだ。もつともだ。そうした儂はかない追憶ふけに耽ふけるのは、お前のために取残とりのこさ
 れているタツタ一つの悲しい特権なのだ。お前以外に、お前のそうした痛々しい追憶を冷
 笑し得うる者がどこに居るのだ……。

と云いたいような、一種の憤慨ふんがいに似た誇りをさえ感じつつ、眼の中を熱くする事もあつた。そうして全国の小学児童に代数きかや幾何きかの面白さを習得じやくとくさすべく、彼自身の貴い経験けんけんによつて、心血を傾けて編纂へんさんしつつかある「小学算術教科書」が思い通りに全国の津々つづ浦うら々らうらにまで普及した嬉しさや、さては又、県視学の眼の前で、複雑な高次方程式に属する四則雑題を見事に解いた教え子の無邪気な笑い顔などを思い出しつつ……云い知れぬ喜びや悲しみに交かわる交かわる満みたされつつ、口にしたバットの火が消えたのも忘れて行く事が多いのであつた。

「……オトウサン……」

という声をツイ耳の傍で聞いたように思ったのはソナ時であった……。

「……………」

ハッと気が付いてみると彼は、その日もいつの間にか平生の習慣通りに、線路伝いに来ていて、ちょうど長い長い堀割の真中あたりに近い枕木の上に立佇まっているのであった。彼のすぐ横には白ペンキ塗の信号柱が、白地に黒線の這入った横木を傾けて、下り列車が近付いている事を暗示していたが、しかし人影らしいものはどこにも見当らなかつた。ただ彼のみすぼらしい姿を左右から挟んだ、高い高い堀割の上半分に、傾いた冬の日がアカアカと照り映えているその又上に、鋼鉄色の澄み切った空がズーツと線路の向うの山の向う側まで傾き蔽うているばかりであった。

そんなような景色を見まわしているうちに彼は、ゆくりなくも彼の子供時代からの体験を思い出していた。

……もしや今のは自分の魂が、自分と呼んだのではあるまいか。……お父さん……と呼んだように思ったのは、自分の聞き違いではなかったろうか……。

といったような考えを一瞬間、頭の中に廻転させながら、キョロキョロとそこいらを見まわしていた。……が、やがてその視線がフツと左手の堀割の高い高い一角に止まると、

彼は又もハツとばかり固くなつてしまった。

彼の頭の上を遙かに圧して切り立つている堀割の西側には、更にモウ一段高く、国道沿いの堤どてがあつた。その堤の上に最前から突立つて見下していたらしい小さな、黒い人影が見えたが、彼の顔がその方向に向き直ると間もなく、その小さい影はモウ一度、一生懸命の甲かんだか高い声で呼びかけた。

「……お父さアーン……」

その声の反響がまだ消えないうちに彼は、カンニングを発見された生徒のように真赤になつてしまった。……線路を歩いてはいけないよ……と云い聞かせた自分の言葉を一瞬間に思い出しつつ、わななく指先でバットの吸いさしを掴つまみ捨てた。そうして返事の声を咽のど喉に詰どまらせつつ、辛かろうじて顔だけ笑つて見せていると、そのうちに、又も甲高い声から落ちて来た。

「お父さアン。きようはねえ。残つて先生のお手伝いして来たんですよ——。書取りの点をつけてねえ……いたんですよ——……」

彼はヤツトの思いで少しばかりうなずいた。そうして吾わがこ児が入学以来ズツト引続いて級長をしていることを、今更ながら気が付いた。同時にその太郎が時々担当の教師に残され

て、採点の手伝いをさせられる事があるので……ソナ時は成るだけ連れ立って帰ろうね……と約束していた事までも思い出した彼は、どうする事も出来ないタマラナイ面目なさに縛られつつ、辛うじて阿弥陀になつた帽子を引直しただけであつた。

「……オトウサーアーン……降りて行きましようかアア……」

という中に太郎は堤の上をズンズンこちらの方へ引返して来た。

「イヤ……俺が登つて行く……」

狼狽した彼はシャガレた声でこう叫ぶと、一足飛びに線路の横の溝を飛び越えて、重たい鞆を抱え直した。四十五度以上の急斜面に植え付けられた芝草の上を、一生懸命に攀じ登り初めたのであつた。

それは労働に慣れない彼にとつては実に死ぬ程の苦しい体験であつた。振返るさえ恐しい三丈あまりの急斜面を、足首の固い兵隊靴の爪先と、片手の力を便りにして匍いで行かうちに、彼は早くも膝頭がガクガクになる程疲れてしまった。崖の中途に乱生した冷めたい草の株を掴むたびに、右手の指先の感覚がズンズン消え失せて行くのを彼は自覚した。反対に彼の顔は流るる汗と水漬に汚れ噎せて、呼吸が詰まりそうになるのを、どうする事も出来ないながらに、彼は子供の手前を考えて、大急ぎに斜面を登るべく、

息も吐かれぬ努力を続けなければならなかった。

……これは子供に唾を吐いた罰だ。子供に禁じた事を、親が犯した報いだ。だからコンナ責苦に遭うのだ……。

といったような、切ない、情ない、息苦しい考えで一杯になりながら、上を見る暇もなく斜面に縋り付いて行くうちに、疲れ切つてブラブラになった足首が、兵隊靴を踏み返して、全身が草のようにブラ下がったままキリキリと廻転しかけた事が二三度あった。その瞬間に彼は、眼も遙かな下の線路に大の字形にタタキ付けられている彼自身の死骸を見下したかのように、魂のドン底までも縮み上らせられたのであったが、それでもなお死物狂いの努力で踏みこたえつつ大切な鞆を抱え直さなければならなかった。

「あぶない。お父さん……お父さん……」

と叫ぶ太郎の声を、すぐ頭の上で聞きながら……。

……堤の上に登ったら、直ぐに太郎を抱き締めてやろう。気の済むまで謝罪つてやろう……。そうして家に帰ったら、妻の位牌の前でモウ一度あやまってやろう……。

そう思い詰め思い詰め急斜面の地獄を匍い登つて来た彼は……しかし……平たい、固い、砂利だらけの国道の上に吾児と並んで立つと、もうソナ元氣は愚かなこと、口を利く力

さえ尽き果てていることに気が付いた。薄い西日を前にして大浪を打つ動悸と呼吸の嵐の中にあらゆる意識力がバラバラになって、グルグルと渦巻いて吹き散らされて行くのをジーンと凝視めて佇んでいるうちに、眼の前の薄黄色い光りの中で、無数の灰色の斑点がユラユラチラチラと明滅するのを感じていた。それからヤツト気を取り直して、太郎に鞆を渡しながら、幽霊のようにヒヨロヒヨロと歩き出した時の心細かったこと……。そのうちに全身を濡れ流れた汗が冷え切ってしまったて、タマラナイ悪寒がゾクゾクと背筋を這いまわり初めた時の情なかつたこと……。

彼は山の中の一軒屋に帰ると、何もかも太郎に投げ任せたまま直ぐに床を取って寝た。そうしてその晩から彼は四十度以上の高い熱を出して重態の肺炎に喘ぎつつ、夢うつつの幾日かを送らなければならなかつた。

彼はその夢うつつの何日目かに、眼の色を変えて駆け付けて来た同僚の橋本訓導の顔付を記憶していた。その後から駆け付けて来た巡查や、医者や、村長さんや、区長さんや、近い界限の百姓たちの只事ならぬ緊張した表情を不思議なほどハッキリ記憶していた。のみならずそれが太郎の死を知らせに来た人々で……。

「コンナ大層な病人に、屍体を見せてええか悪いか」

「知らせたら病気に障りはせんか」

といったような事を、土間の暗い処でヒソヒソと相談している事実や何かまでも、慥かに察しているにはいた。けれども彼は別に驚きも悲しみもしなかった。おおかたそれは彼の意識が高熱のために朦朧状態に陥っていたせいであろう。ただ夢のように……。

……そうかなあ……太郎は死んだのかなあ……俺も一所にあの世へ行くのかなあ……。と思いつつ、別に悲しいという気もしないまま、生ぬるい涙をあとからあとから流しているばかりであった。

それからもう一つその翌る日のこと……かどうかよくわからないが、ウツスリ眼を醒ました彼は囁やくような声で話し合っている女の声をツイ枕元の近くで聞いた。ちようどラムプの芯が極度に小さくして在ったので、そこが自分の家であったかどうかすら判然しなかつたが、多分介抱のために付添っていた、近くの部落のお神さん達か何かであつたろう。

「……ホンニまあ。坊ちゃんは、ちようどあの堀割のまん中の信号の下でなあ……」

「……マアなあ……お父さんの病気が気にかかったかしてなあ……先生に隠れて鉄道づた

いに近道さつしやつたもんじやろうて皆云い御座るげなが……」

「……まあ。可愛そうになあ……。あの雨風の中になあ……」

「それでなあ。とうとう坊ちゃん顔はお父さんに見せずに火葬してしまつたて、なあ……」

「……何という、むごい事かいなあ……」

「そんでなあ……先生が寝付かつしやつてから、このかた毎日坊ちゃんに御飯をば喰べさせよつた学校の小使いの婆さんがなあ。代られるもんなら代ろうがて云うてなあ。自分の孫が死んだばしのごと歎いてなあ……」

あとはスツスツという啜り泣きの声が聞こえるばかりであつたが、彼はそれでも別段に気に止めなかつた。そうした言葉の意味を考える力も無いままに又もうとうとしかけたのであつた。

「橋本先生も云うて御座つたけんどなあ。お父さんもモウこのまま死んで終わつしやつた方が幸福かも知れんち云うてなあ……」

といったようなボソボソ話を聞くともなく耳に止めながら……自分が死んだ報せを聞いて、口をアングリと開いたまま、眼をパチパチさせている人々の顔と、向い合つて微笑し

ながら……。

けれどもそのうちに、さしもの大熱が奇蹟的に引いてしまうと、彼は一時、放神状態に陥ってしまった。和尚さんがお経を読みに来ても知らん顔をして縁側に腰をかけていたり、妻の生家から見舞いのために配達させていた「豆」乳を一本も飲まなかったりしていたが、それでも学校に出る事だけは忘れなかったと見えて、体力が出て来ると間もなく、何の予告もしないまま、黒い鞆を抱え込んでコツコツと登校し初めたのであった。

教員室の連中は皆驚いた。見違えるほど寝れ果てた顔に、著しく白髪しろがみの殖えた無精髻ぶしょうひげを蓬々ぼうぼうと生やした彼の相好そうこうを振り返りつつ、互いに眼と眼を見交した。その中にも同僚の橋本訓導は、真先まっさきに椅子いすから離れて駆け寄って来て、彼の肩に両手をかけながら声を潤うるませた。

「……………どうしたんだ君は。……………シシ……………シツカリしてくれ給え……………」

眼をしばたたきながら、椅子から立ち上った校長も、その横合いから彼に近付いて来た。「……………どうか充分に休んでくれ給え。吾々われわれや父兄は勿論のこと、学務課でも皆、非常に同情しているのだから……………」

と赤ん坊を諭さとすように背中を撫なでまわしたのであったが、しかし、そんな親切や同情が

彼には、ちつとも通じないらしかった。ただ分厚い近眼鏡の下から、白い眼でジロリと教室の内部を見廻わしただけで、そのまま自分の椅子に腰を卸すと、彼の補欠をしていた末席の教員を招き寄せて学科の引継を受けました。そうして乞食のように見窄らしくなった先生の姿に驚いている生徒たちに向つて、ポツポツと講義を初めたのであった。

それから午後になつて教員室の連中から、

「無理もない」

というような眼付きで見送られながら校門を出るとそのまま右に曲つて、生徒たちが見送っているのも構わずにサツサと線路を伝い初めたのであった。……又も以前の通りの思出を繰返しつつ、……自分の帰りを待っているであろう妻子の姿を、木の間隠れの一軒屋の中に描き出しつつ……。

彼はそれから後、来る日も来る日もそうした昔の習慣を判で捺したように繰返し初めたのであったが、しかしその中にはタツター一つ以前と違っている事があつた。それは学校を出てから間もない堀割の途中に立っている白いシグナルの下まで来ると、おきまりのようにチヨット立止まつて見る事であつた。

彼はそうしてそこいらをジロジロと見廻しながら、吾児の轢かれた遺跡らしいものを探

し出そうとするつもりらしかったが、既に幾度も幾度も雨風に洗い流された後なので、そんな形跡はどこにも発見される筈が無かった。

しかし、それでも彼は毎日毎日、そんな事を繰り返す器械か何ぞのように、おんなじ処に立ち佇^どまつて、くり返しくり返しおんなじ処を見まわしたので、そこいらに横たわっている数本の枕木の木目や節穴、砂利の一粒一粒の重なり合い、又はその近まわりに生えている芝草や、野^{のいばら}茨の枝ぶりまでも、家に帰つて寝る時に、夜具の中でアリアリと思ひ出し得るほど明確に記憶してしまった。そうして彼はドンナ^{ほか}二外の^{ほか}考えで夢中になっている時でも、シグナルの下のそのあたりへ来ると、殆^{ほと}んど無意識に立^{たち}佇^どまつて、そこいらを一度り見まわした後でなければ、一步も先へ進めないようにスツカリ癡^ちづけられてしまったのであった……何^{なぜ}故^ゆそこに立^{たち}佇^どまつているのか、自分自身でも解らないままに、暗い暗い、淋^{さび}しい淋^{さび}しい気持ちになって、狂^な染^じみの深い石ころの形や、枕木の切口の恰^{かつ}好^{こう}や、軌条の継目の間隔を、一つ一つにジーツと見守らなければ気が済まないものであった……………

「お父さん」

というハッキリした声が聞こえたのは、ちょうど彼がそうしている時であった。

彼はその声を聞くや否や、電気に打たれたようにハツと首を縮めた。無意識のうちに眼をシツカリと閉じながら、肩をすぼめて固くなつたが、やがて又、静かに眼を見開いて、オズオズと左手の高い処を見上げた。寂しい霜枯れの草に蔽われた赤土の斜面と、その上に立っている小さな、黒い人影を予想しながら……。

ところが現在、彼の眼の前に展開している堀割の内側は、そんな予想と丸で違つた光景をあらわしていた。見渡す限り草も木も、燃え立つような若緑に蔽われていて、色とりどりの春の花が、巨大な左右の土の斜面の上を、漚てしもなく群がり輝やき、流れ濛い、乱れ咲いていた。線路の向うの自分の家を包む山の斜面の中程には、散り残つた山桜が白々と重なり合つていた。朗らかに晴れ静まつた青空には、洋紅色の幻覚をほのめかす白い雲がほのぼのとゆらめき渡つて、遠く近くに呼びかわす雲雀の声や、頬白の声さえも和やかであつた。

……その中のどこにも吾兎らしい声は聞こえない……どここの物蔭にも太郎らしい姿は発見されない……全く意外千万な眩ぶしさと、華やかさに満ち満ちた世界のまん中に、昔のまんまの見窄らしい彼自身の姿を、タツタ一つポツネンと発見した彼……。

……彼がその時に、どんなに奇妙な声を立てて泣き出したか……それから、どんなに正

体もなく泣き濡れつつ線路の上をよろめいて、山の中の一軒屋へ帰って行ったか……：そうして自分の家に帰り着くや否や、箆筒の上に飾つてある妻子の位牌の前に這いずりまわり、転がりまわりつつ、どんなに大きな声をあげて泣き崩れたか……：心ゆくまで泣いては詫び、あやまつては慟哭したか……。そうして暫くしてからヤット正気付いた彼が、見る人も聞く人も無い一軒屋の中で、そうしている自分の恰好の見つともなさを、気付き過ぎる程気付きながらも、ちつとも恥かしいと思わなかつたばかりでなく、もつともつと自分を恥かしめ、苛なみ苦しめてくれ……：というように、白木の位牌を二つながら抱き締めて、どんなに頬ずりをして、接吻しつつ、あこがれ歎いたことか……。

「……おお……：キセ子……：キセ子……：俺が悪かつた。重々悪かつた。堪忍……：堪忍してくれ……：おおつ。太郎……：太郎太郎。お父さんが……：お父さんが悪かつた。モウ……：もう決して、お父さんは線路を通りません……：通りません。……：力……：堪忍して……：堪忍して下さアアア——イ……：」

と声の涸れるほど繰返し繰返し叫び続けたことか……。

彼は依然として枯木林の間の霜の線路を渡りつづけながら、その時の自分の姿をマザマ

ザと眼の前に凝視した。その瞼の内側が自ずと熱くなつて、何ともいえない息苦しい塊ま
りが、咽喉の奥から、鼻の穴の奥の方へギクギクとコミ上げて来るのを自覚しながら……。
「……アツハツハ……」

と不意に足の下で笑う声がしたので、彼は飛び上らむばかりに驚いた。思わず二三歩走
り出しながらギツクリと立ち佇まって、汗ばんだ額を撫で上げつつ線路の前後を大急ぎで
見まわしたが、勿論、そこいらに人間が寝ている筈は無かった。薄霜を帯びた枕木と濡れ
たレールの連続が、やはり白い霜を冠った礫の大群の上に重なり合っているばかりであつ
た。

彼の左右には相も変らぬ枯木林が、奥もわからぬ程立ち並んで、黄色く光る曇り日の下
に灰色の梢を煙らせていた。そうしてその間をモウすこし行くと、見晴らしのいい高い線
路に出る白い標識柱の前にピツタリと立佇まっている彼自身を発見したのであつた。

「……シマツタ……」

と彼はその時口の中でつぶやいた。……あれだけ位牌の前で誓つたのに……済まない事
をした……と心の中で思つても見た。けれども最早取返しが付かない処まで来ている事に
気が付くと、シツカリと奥歯を噛み締めて眼を閉じた。

それから彼は又も、片手をソツと額に当てながら今一度、背後うしろを振り返つてみた。ここまで伝つて来た線路の光景と、今まで考え続けて来た事柄を、逆にさかのぼつて考え出そうと努力した。あれだけ真剣に誓い固めた約束を、それから一年近くも過ぎ去つた今朝けさに限つて、こんなに訳もなく破つてしまつたそのそもその発端の動機を思い出そうと焦燥あせつたが、しかし、それはモウ十年も昔の事のように彼の記憶から遠ざかつていて、どこをドンナ風に歩いて来たか……いつの間に帽子を後ろ向きに冠かぶり換えたか……鞆を右手に持ち直したかという事すら考え出すことが出来なかつた。ただズツト以前の習慣通りに、鞆を持ち換え持ち換え線路を伝つて、ここまで来たに違い無い事が推測されるだけであつた。……しかしその代りに、たつた今ダシヌケに足の下で笑つたものの正体が彼自身にわかりかけたように思つたので、自分の背後うしろの枕木の一つ一つを念を入れて踏み付けながら引返し初めた。すると間もなく彼の立たちどり止まつていた処から四五本目の、古い枕木の一方が、彼の体重を支えかねてグイグイと砂利ざりの中へ傾き込んだ。その拍子に他の一端が持ち上つて軌条の下縁とスレ合いなから……ガガガ……と音を立てたのであつた。

彼はその音を聞くと同時に、タツタ今の笑い声の正体がわかつたので、ホツと安心して溜息ためいきを吐いた。それにつれて気が弛ゆるんだらしく、頭の毛が一本一本ザワザワとして、

からだ
身体中にゾヨゾヨと鳥肌が出来かかったが、彼はそれを打消すように肩を強くゆすり上げた。黒い鞆を二三度左右に持ち換えて、切れるように冷めたくなった耳朶をコスリまわした。それから鼻息の露に濡れた胡麻塩髻を撫でまわして、歪みかけた釣鐘マンントの襟をゆすり直すと、又も、スタスタと学校の方へ線路を伝い初めた。いつも踏切の近くで出会う下りの石炭列車が、モウ来る時分だと思ひ、何度も何度も背後を振り返りながら……。

彼は、それから間もなく、今までの悲しい思出からキレイに切り離されて、好きな数学の事ばかりを考えながら歩いていった。彼自身にとって最も幸福な、数学ずくめの冥想の中へグングンと深入りして行つた。

彼の眼には、彼の足の下に後から後から現われて来る線路の枕木の間ごとに変化して行く礫石の群れの特徴が、ずっと前に研究しかけたまま忘れかけている函数論や、プロバビリチーの証明そのもののように見えて来た。彼は又、枕木と軌条が擦れ合つた振動が、人間の笑い声に聞こえて来るまでの錯覚作用を、数理的に説明すべく、しきりに考え廻わしてみた。それは何の不思議もない簡単な出来事で、考えるさえ馬鹿馬鹿しい事実であつた。

が、しかしその簡単な枕木の振動の音波が人間の鼓膜に伝わって、脳髓に反射されて、全身の神経に伝わって、肌を粟立たせるまでの経路を考えて来ると、最早、数理的な頭ではカイモク見当の付けようの無い神秘作用みたようなものになって行くのが、重ね重ね腹が立つて仕様がなかった。人間が機関車に正面すると、ちようど蛇へびに魅入みいられた蛙かえるのように動けなくなつて、そのまま、轢ひき殺されてしまうのも、やはり脳髓の神秘作用に違い無いのだが……。一体脳髓の反射作用と、意識作用との間にはドンナ数理的な機構の区別が在るのだろうか……。

……突然……彼の眼の前を白いものがスーッと横切つたので、彼は何の気もなく眼をあげてみた。……今頃白い蝶ちょうが居るか知らんと不思議に思いながら……けれどもそこいらには蝶々らしいものは愚か、白いものすら見えなかった。

彼はその時に高い、見晴らしのいい線路の上に来ていた。

彼の視線のはるか向うには、線路と一直線に並行して横たわっている国道と、その上に重なり合つて並んでいる部落の家々が見えた。それは彼が昔から見慣れている風景に違い無いのであったが、今朝けさはどうした事かその風景がソックリそのまんまに、数学の思索の中に浮き出て来る異常なフラッシュバックの感じに変化しているように思われた。その景

色の中の家や、立木や、はたけ畠や、電柱が、数学の中に使われる文字や符号…… $\sqrt{\quad}$ 、 \parallel 、 0 、 8 、 KLM 、 XYZ 、 α β γ 、 θ ω 、 π ……なんどに変化して、三角函数が展開されたように……高次方程式の根が求められた時の複雑な分数式のように……薄黄色い雲の下に神秘的なハレーションを起しつつ、は涯てしもなく輝やき並んでいた。形に表わす事の出来ないイマジナリー・ナンバーや、無理数や、じゅんかん循環環少数などを数限りなく含んで……。

彼は、彼を取巻く野山のすべてが、あらゆる不合理と矛盾とを含んだ公式と方程式にみちみちている事を直覚した。そうして、それ等のすべてが彼を無言のうちにあざけ嘲り、おび脅やかしているかのような圧迫感に打たれつつ、又もガツクリとうなだれて歩き出した。そうしてそのような非数理的な環境に対して反抗するかにように彼は、ソロソロと考え初めたのであった。

……俺は小さい時から数学の天才であった。

……今もそのつもりでいる。

……だから教育家になったのだ。今の教育法に一大革命を起すべく……児童のアタマに隠れている数理的な天才を、社会に活かして働かすべく……。

……しかし今の教育法では駄目だ。全く駄目なんだ。今の教育法は、すべての人間の特

徴を殺してしまう教育法なんだ。数学だけ甲でいる事を許さない教育法なんだ。

……だから今までにドレ程の数学家が、自分の天才を発見し得ずに、闇から闇に葬^{ほうむ}られ去ったことであろう。

……俺は今日まで黙々として、そうした教育法と戦つて来た。そうして幾多の数学家の卵を地上に孵化^{ふか}させて来た。

……太郎もその卵の一つであつた。

……溫柔^{わとな}しい、無口な優良児であつた太郎は、俺が教えてやるまにまに、彼独特の数理的な天才をスクスクと伸ばして行つた。もう代数や幾何の初等程度を理解していたばかりでなく、自分で「LOGを作る事さえ出来た。……彼が自分で貯^{たく}めたバットの銀紙で球を作りながら、時々その重量と直径とを比較して行くうちに、直径の三乗と重量とが正比例して増加して行く事を、方眼紙にドットして行つた点の軌跡^{きせき}の曲線から発見し得た時の喜びようは、今でもこの眼に縋^{こび}り付いている。眼を細くして、頬^{ほっ}ペタを真赤にして、低い鼻をピクピクさせて、偉大なオデコを光らしているその横顔……。

……けれども俺は太郎に命じて、そうした数理的才能を決して他人の前で発表させなかつた。学校の教員仲間にも知らせないようにしていた。「又余計な事をする」と云つて視

学官連中が膨れ面ふくらつらをするにきまつていたから……。

……視学官ぐらいに何がわかるものか。彼奴等きやつらは教育家じゃない。タダの事務員に過ぎないのだ。

……ネエ。太郎、そうじゃないか。

……彼奴やつらの数学は、生徒職員の数と、夏冬の休暇に支給される鉄道割引券の請求歩合と、自分の月給の勘定ぐらいにしか役に立たないのだ。ハハハ……。

……ネエ。太郎……。

……お父さんはチャント知っているんだよ。お前が空前の数学家になり得る素質を持っていることを……アインスタインにも敗けない位スゴイ頭を持っていることを……。

……しかし、お前自身はソナ事を夢にも知らなかった。お父さんが云って聞かせなかったから……だから残念とも何とも思わなかったであろう。お父さんの事ばかり思って死んだのであろう……。

……だけでも……だけでも……。

ここまで考えて来ると彼はハタと立ち停まった。

……だけでも……だけでも……。

というところまで考えて来ると、それっきり、どうしてもその先が考えられなかった彼は、枕木の上に両足を揃えてしまったのであった。ピッタリと運転を休止した脳髓の空虚を眼球のうしろ側でジイツと凝視しながら……。

それは彼の疲れ切つて働けなくなった脳髓が、頭蓋骨の空洞の中に作り出している、無限の時間と空間とを抱擁した、薄暗い静寂であつた。どうにも動きの取れなくなった自我意識の、底知れぬ休止であつた。どう考えようとしても考えることの出来ない……。

彼は地底の暗黒の中に封じ込められているような気持になつて、両眼を大きく大きく見開いて行つた。しまいには瞼がチクチクするくらい、まん丸く眼の球を剥き出して行つたが、そのうちにその瞳の上の方から、ウツスリと白い光線がさし込んで来ると、それに連れて眼の前がだんだん明るくなつて来た。

彼の眼の前には見覚えのある線路の継目と、節穴の在る枕木と、その下から噴き出す白い土に塗れた砂利の群れが並んでいた。

そこは太郎が轢かれた場所に違い無いのであつた。

彼は徐ろに眼をあげて、彼の横に突立っているシグナルの白い柱を仰いだ。黒線の這入

った白い横木が、四十五度近く傾いている上に、ピカピカと張り詰められている鋼鉄色の青空を仰いだ。そうして今一度、吾児の血を吸い込んだであろう足の下、砂利の間の薄暗がり、一つ一つに覗き込みつつ凝視した。その砂利の間の薄暗がりから、頭だけ出している小さな犬蓼いぬたでの、血よりも紅い茎あかの折れ曲りを一心に見下していた。

……だけでも……だけでも……。

という言葉によって行き詰まらせられた脳髓の運転の休止が、又も無限の時空を抱擁ほうようしつつ、彼の頭の上にの押し加かって来るのを、ジリジリと我慢しながら……どこか遠い処で、ケタタマシク吹立ふきたてていた非常汽笛が、次第次第に背後に迫って来るのを、夢うつつのように意識しながら……。

……だけでも……だけでも……。

と考えながら彼は自分の額ひたいを、右手でシツカリと押え付けてみた。

……だけでも……だけでも……。

……今まで俺が考えて来た事は、みんな夢じゃないか知らん。……キセ子が死んだのも、悴せがれがひ轢ひき殺されたのも……それからタツタ今まで考え続けて来た色々な事も、みんな頭を悪くしている俺の幻覚に過ぎないのじゃないか知らん。神経衰弱から湧わき出した、一種

のあられもないイリユージョンじゃないかしらん……。

……イヤ……：そうなんだそうなんだ……イリユージョンだイリユージョンだ……。

……俺は一種の自己催眠にかかってコンナ下らない事を考え続けて来たのだ。俺の神経衰弱がこの頃だんだん非道ひどくなって来たために、自己暗示の力が無暗むやみに高まって来たお蔭でコンナみじめな事ばかり妄想するようになって来たのだ。

……ナアーンダ。……何でもないじゃないか……。

……妻のキセ子も、子供の太郎も、まだチャンと生きているのだ。太郎はモウ、とつくの昔に学校に行き着いているし、キセ子は又キセ子で、今頃は俺の机の上にハタキでも掛けているのじゃないか。あの大切な「小学算術」の草案の上に……。

……アハハハハハハ……。

……イケナイイケナイ。こんな下らない妄想に囚とらわれていると俺はキチガイになるかも知れないぞ……。

……アハ……アハ……アハ……。

彼はそう思い思い、スツカリ軽い気持になって微笑しいしい、又も上半身を傾けて、線路の上を歩き出そうとした。するとその途端に、思いがけない背後から、突然非常な力で

……グワーン……とドヤシ付けられたように感じた。そうしてタツタ今、凝視していた砂^バ利^{ラス}の上に、何の苦もなく突き倒されたように思ったが、その瞬間に彼は真黒な車輪の音も無い廻転と、その間に重なり合つて閃^{ひら}めき飛ぶ赤い光^{こうみょう}明のダンダラ縞^{しま}を認めた。……
と、思ふうちに後頭部がチクチク痛み初めて、眼の前がグングン暗くなつて来たので、二三度大きく瞬^{まばたき}をしてみた。

……お父さんお父さんお父さんお父さんお父さん……。

と呼ぶ太郎のハッキリした呼び声が、だんだんと近付いて来た。そうして彼の耳の傍まで来て鼓膜の底の底まで泌^しみ渡つたと思うと、そのままフツツリと消えてしまったが、しかし彼はその声を聞くと、スツカリ安心したかのように眼を閉じて、投げ出した両手の間の砂利の中にガツクリと顔を埋めた。そうしてその顔を、すこしばかり横に向けながらニツコリと白い歯を見せた。

「……ナアーンダ。お前だったのか……アハ……アハ……アハ……アハ……」

青空文庫情報

底本：「夢野久作全集⁸」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成4）年1月22日第1刷発行

底本の親本：「瓶詰地獄」春陽堂

1933（昭和8）年5月15日発行

※「気持」「気持ち」の不統一は底本のママとした。「初め」は「始め」が正しいと思われるが、これも底本のママとした。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5186）を、大振りにつくっています。

入力：柴田卓治

校正：柳沢成雄

2001年4月19日公開

2006年3月16日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

木魂

夢野久作

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>